

マナビジュアルノート 感染症・病原体とくすり

編著：継田雅美

著：辻 泰弘/松元一明/村木優一

世界的に問題になっている抗菌薬の適正使用管理が、今、薬剤師に求められています。広い抗菌スペクトルがあり、効果が期待されるからキノロン系やカルバペネム系抗菌薬などを使おうという時代ではありませんが、実際にどういった抗菌薬を使用したらよいのでしょうか。

経験的治療（エンピリックセラピー）では症状や患者背景から起因菌を推定し、標的治療（デフィニティブセラピー）では、確定した起因菌に対して抗菌薬を選ぶことになりますが、いずれにしても細菌に効果的な抗菌薬を知らなければなりません。添付文書をみても抗菌薬の適応菌種が数多く書かれていて、実際、ある特定の菌に抗菌薬を選択すると迷ってしまうことが多いのではないのでしょうか。とくに近年は同じ細菌でも耐性菌が出現し、本当に使用してよい抗菌薬がわかり難くなっています。

実際の治療ではさらに感染経路（臓器）や宿主（患者さん）の状態を考慮して、同じ菌でも、尿路感染症なのか呼吸器感染症なのか、また患者さんが易感染性なのかどうかによっても抗菌薬の選択を変える必要があります。

感染症治療の書籍は数多く出版されていますが、一見、複雑にみえる感染症治療を、図を交えて実践的にやさしく学べる書籍が本書です。本書の構成は、病原微生物について、感染症について、抗菌薬について、と3部に分け、それぞれの専門的な内容が非常にわかりやすくまとめられています。まず細菌を理解しなければなりません。臨床で重要な病原微生物を整理し、それぞれの菌がどのような感染症を引き起こしやすいのか、どういった抗菌薬が有効なのか、実臨床にそったポイントが的確に解説されています。感染症の視点から、感染症を引き起こしやすい菌は何なのか、具体的な検査・診断から治療まで書かれ、感染症と細菌に効果的な抗菌薬の選択を理解することができます。抗菌薬の目線でも、抗菌薬がどういった菌に有効なの



AB判／170頁

定価：3,960円（本体3,600円＋税10%）

発行：南山堂（2023年12月）

か、同じ系列の抗菌薬同士で比較がなされ、それぞれの感染症治療における抗菌薬の位置づけが明確に示されています。

これまでは多くの菌種、抗菌薬の使い分けについて添付文書を抜粋して羅列したような書籍や専門過ぎて難しい書籍が目についていましたが、本書は、こんな書籍があったらいいと思っていた要点を押さえた素晴らしい書籍になっています。執筆者が実臨床で経験豊富な薬剤師であり、また教育の面からも優れた先生方であるからこそできあがった書籍だと思います。感染症治療における抗菌薬の選択について、これから抗菌薬や感染症治療について学びたい薬剤師、研修医、学生まで、幅広い層に読んでいただける、本当におすすめしたい一冊です。

順天堂大学医学部附属順天堂医院薬剤部 部長

木村 利美